

転生したらヒーローアカデミアだった件

生まれ変わったらスライムになりたい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔王への進化^{ハーヴェストフェスティバル}から目が覚めたら【僕のヒーローアカデミア】の世界へと転生していたりムル。その世界でリムルは雄英高校へと進学し、プロヒーローを目指す、

そんなパラレルワールドのお話である。

この小説は転スラとヒロアカにおいて多少のネタバレを含みます。

そして転スラとヒロアカの二作品の物語を知った後にこの作品を読むことを推奨します。

目 次

「また転生したら異世界だつた件」

ヘドロ事件

解き放たれし者

ヴエルドラ日記

新ヒーロー「ファウスト」

雄英高校試験

個性把握テスト

高校生活二日目と戦闘訓練（前編）

55 45 37 30 22 16 9 1

「また転生したら異世界だつた件」

『告。魔王への進化による変化が開始されました。身体組成が再構成され新たな種族へと進化します。』

魔物連邦国では重要な儀式が行われていた。

ファルムスの二万の軍勢を滅ぼした魔物連邦国の盟主、リムル^{リムル}は、ペストはその人間達の魂を養分とし、魔王への進化が開始されていたところである。

『種族：粘性生物から魔粘性精神体への超進化……成功しました。』

魔王への進化の進捗状況を淡々と読み上げていた。

『すべての身体能力が大幅に上昇しました。続けて旧個体にて寄得の各種スキル及び耐性の再取得……成功しました。』

『新規固有スキル。無限再生・万能感知・魔王霸氣・強化分身・万能糸を獲得……成功しました。』

『新規耐性。自然影響無効・状態異常無効・精神攻撃耐性・聖魔攻撃耐性を獲得……成功しました。』

『以上で進化を完了します。』

ここでようやく魔王への進化が終わつたかと思われたが、大賢者の声はまだ続く。

『告。ユニークスキル【大賢者】より世界の言葉へ請願。【大賢者】の進化を申請。』

『…了。ユニークスキル【大賢者】の申請を受理。』

『大賢者が進化へ挑戦。』

『……失敗しました。』

『再度実行します。……失敗しました。再度実行します。……失敗しました。再度実行します。……失敗しました。』

——再度実行します。……失敗しました。

『告。大賢者が変質者を統合に魔王への進化の祝福を得て進化に挑めた。』

『告。大賢者が変質者を統合に魔王への進化の祝福を得て進化に戦。』

……………成功しました。』

それは無限に繰り返された試みへの褒美であるかのように

『ユニークスキル 大賢者は究極能力【智慧之王】に進化しました。』

成し遂げられた超克がキツカケとなり、続く奇跡を引き起こす。

『【暴食者】の進化を希求。【心無者】を統合に実行。』

リムルの意識の感知し得ぬ魂の深淵にて。

彼の望みを叶える為に、智慧之王の統率の元能力は確実に最適化されていく。

そして、魔王への進化はやがて終わりを迎える。

しかし、この物語ではもしかしたらこんなパラレルワールドもあつたかもしれない……そんなお話である。

俺はリムル＝テンペスト。スライムだ。

とあることで異世界にスライムとして転生した俺だったが、今は多くの仲間たちと一緒に楽しく暮らしている……はずだったのだが「ここは…どこだ？」

あたりを見渡すと見たことのない…いや、正確には（異世界では）見たことのない景色が広がっていた。

そう、ここは前世では見慣れた景色。

聳え立つビル、交差点で交わる多く人間。そして整備された道路を走る車。

それは前世で見た光景とほぼ同じだった。ただ一つの点を除いて。

「うわああ！でっけえヴィラン！」

線路の上に立ち暴れる巨人を見ている民衆からそんな声が聞こえた。

しかし、民衆も驚きはしているがこれを異常と思っている者はいないうだ。これが前世ならば明らかにおかしい光景であるにも関わらず。

『告。これは主の前世とは別の世界であると推測されます。』

いつもの相棒の声が聞こえたのだが、どうやらいつもと少し雰囲気

マスター
大賢者

が違うような気がする。

「なるほどな…。というか大賢者…なのかな?」

『否。ユニークスキル 大賢者は究極能力【智慧之王】へと進化しました。』

「なるほど…道理で流暢に喋れるようになってるわけだ。」

『もはや私に答えられないことはありません。』

そう威張る智慧之王。ラフアエルそしてそんな智慧之王を見て頬もしく思つた。

(いつも頼りになつた相棒大賢者がさらに頼もしくなつたわけか。)

「おう!期待しているぞ!」

そんな会話をしている時、突如俺の体に異変が起こつた。

(!?なんだよ、コレ……)

俺の脳内に存在しない【15年間の記憶】が流れてきたのである。『告。この記憶はこの世界には存在しますが、マスター主が体験していない架空の記憶であると推測されます。』

そこに流れてきた記憶として

優しい父と母から生まれてきた記憶

父は事故に遭い、死んだしまった記憶

そして自分もこの事故に巻き込まれてたが、ヒーローに助けられ自分でヒーローを志した記憶

すべて架空のものであるが、確かにこの世界に存在する。

俺も体験したわけではないが、確かに脳裏に焼き付いている。少しずつ体がこの世界に順応しているということだろう。

「なあラファエルさん。俺つて元の世界に戻ることが出来るのか?」

『否。当分は戻ることはできないと思われます。しかし、この世界と元の世界では時の速度が異なる為、この世界に滞在するのはなんの問題もないと思われます。』

俺としては元の世界のことが心配だった為ラファエルさんに帰る方法を聞いたのだが、それはわからないらしい。

「うーん困つたな。これからどうしたものか。」

『告。雄英高校へ入学し、プロヒーローを目指すことを推奨します。』
（雄英高校？確かに記憶にあつた気がする。俺は今中学3年生というこ
とになつてゐる訳だから受験するのは今年になるわけか。）

雄英高校の偏差値は7.9で倍率は300倍！誰もが認める国内最
難関の高校であり、N.O.・1ヒーローであるオールマイトを筆頭にN
O.・2であるエンデヴァー、N.O.・4ベストジーニストなどを派出し
てゐるらしい。

「そうだね、それじゃあその高校に向けて頑張るとするよ。」

そう言つたものの、大賢者のさらに上の智慧之王さんならいくら難
関校とはいえ筆記試験は楽勝だろう。

『筆記試験は問題ないかと思われますが、志望するヒーロー科には筆
記とは別に実技試験が用意されています。』

そういえばそんな記憶があつた気がする。とはいえ、魔王となつた
自分なら何も心配はいらないだろう。そもそも思つたのだが、一応
智慧之王さんに確認してみる。

「なあ、俺つて魔王になつてからどのくらい強くなつてるんだ？」
『以前の10倍です。』

「ええ!!」

想像以上に強くなつてゐるようだ。

そして智慧之王さん曰く暴食者^{グルトニー}が進化し、究極能力^{アルティメットスキル}である
暴食之王へと進化したらしい。

更に驚きなのだが、ユニークスキルである無限牢獄が究極能力^{アルティメットスキル}で
ある誓約之王へと進化したらしい。これでアルティメットスキルが
3つとなる訳で、どこから突つ込んでいいのやら。

そんな会話をラファエルさんとしていたら後ろのトンネルから笑
い声が聞こえてくる。

「あーっはっはっは！」

そこには右手にノートを持ちながら上を向きながらこつちへ歩い
てくる緑髪の少年がいた。

俺は少し苦笑いしながらその少年のことを見つめる。

彼は目を瞑っていたのか、こちらには気づいていないようだつた。

その瞬間！少年の後ろのマンホールが吹っ飛ばされ、その中からヘドロのような異形の怪物が出てきた。

異形の怪物は少年を襲い始めた。襲われながら少年は必死に抵抗しているが、その抵抗も虚しくヘドロの異形は口から少年の体内へ侵入している。

「掴めるわけないだろう？ 流動的なんだから。」

その一部始終を見ていた俺はヘドロの異形に向かつてコンクリートの上をゆっくりと歩く。

射程圏内へと入つたことを確認したので、ヘドロの異形に向かつてこう叫んだ。

「喰らいつくせ！ 暴食之王！」
ベルゼビュート

暴食之王の力は凄まじく、あつという間にヘドロを全て食い尽くしてしまつた。

助けた少年の方へ目を移すと、どうやら氣絶しているようだつた。

俺は（仕方ないな）と思いつつ彼が目を覚ますまでここで待機しようと 생각ていたら、ラファエルさんが思いもやらないことを報告してきた。

『告。個体名：オールマイトがこちらへ接近しています。恐らくその狙いはこの少年の救出でしよう。』

報告から数秒が経つたとき

「私が来たあああ！」

オールマイトが登場した。

オールマイトはキヨロキヨロと周囲を見渡し、意識を失っている少年を見た後に俺に話しかけてきた。

「なあ少女。ここへん（敵）敵を見かけなかつたかい？」
ヴァイラン

「あーあのヘドロみたいな奴のことですかね？ それなら確かに見かけましたよ」

「そうか。それならソイツがどこに行つたのか教えて欲しいんだが。」

俺はそんな会話をしながら笑顔で答える

「ソイツ、俺が食べちゃいました！」

目を丸くしながらオールマイトは呆れたように

「何を言つてるんだね少女、それなら敵ヴィランは君の胃袋の中にいるとでも言うのかな？」

と冗談混じりに言つてきたので、俺は胃袋から気絶しているヘドロを取り出し、オールマイトに突きつける。

まあ胃袋から出したといつてもオールマイトからしたら急に出てきたようにしか見えないようだけど。

するとオールマイトは本氣で驚いた顔をするので、少しドヤ顔をしながらオールマイトを見つめていた。

「いやあ驚いたよ少女！だが人を助ける為とはいえ、人に向かつて個性を使つちやあいけないよ！」

ヘドロをペットボトルに詰めながらぐうの音も出ないことを見てきたため軽く会釈をしながら「すいません」と謝つておいた。

「う、うくん」

オールマイトと冗談混じりの会話をしていたら少年が目を覚ましたようだつた。

「オ、オ、オールマイトオオオ?!ほつ、本物だああ!!」

恐らくこの少年は余程オールマイトのことが好きなのだろう。

そうでもなきやこの反応は過剰すぎるからだ。

「サ、サ、サインを……」

少年は慌てながらノートを開く。

つてかそのノートには既に：

「つてしてあるううう!!!」

叫びながら少年は泣いて喜んでいた。

「じゃ、私はこれを警察に届けるので。液晶越しにまた会おう！」

そう言いながらオールマイトはどこかへ飛んでいった

のだが、

「ラファエルさん。あれつてほつといて大丈夫か？」
苦笑いしながらラファエルさんに聞いてみた。

『否。追いかけることを推奨します。』

あの少年、オールマイトが跳ぶ直前にしがみつくとはさては只者じゃやいな？

とはいえ今から飛んでいくにしてもオールマイトのスピードが速くて見失つてしまいそうだ。

『オールマイトは高層ビルに着地することが推測されます。したがつてその後に転移魔法を使うことを推奨します。』

流石ラファエルさん、頼もしいね。

—————
ラファエルさんの予想通りオールマイトは高層ビルの屋上に着地したようだ。

そしてそれを確認し、転移魔法を使う。

「全く…それじゃあ私はマジで急いでるからこれで。」

オールマイトはかなり焦つているらしく、今すぐにでもここから去りたがつていてるような気がする。

「待つ、待つてください！」

「待たない！」

こんな感じのやりとりを見てた俺は、これじやあ少し少年が酷だと思つた為、オールマイトに言葉をかけることにした。

「少しくらい話を聞いてあげてもいいんじゃないですか？警察の所に行くくらいなら後でも良いですって。」

「少女!!…どうしてここに!!？」

ここにいるはずの無い俺のことをオールマイトは驚きながら見ていた。

(うーん、どうしてつて言われても…俺はラファエルさんに言われただけだし…なんか良い言い訳ないの？ラファエルさん。)

『告。個体名：オールマイトにフルポーションを渡すことを推奨します。』

(いやいやいや、なんでそななるんだよ)と心の中でラファエルさんに突っ込みながらも悩みながらもその指示に従うこととした。

「いや、折角なのでプレゼントしに来たんですよ。これ、あげますよ。どんな傷でも治せる薬みたいなものです。」

そう言いながら瓶に入ったフルボーションをオールマイトに投げつける。

「あ、ああ。それでは有り難く貰うとするよ。」

戸惑いながらも受け取ってくれるオールマイト。見ず知らずの人

から渡されたものを受け取る辺り本当に聖人なのかもしない。

「まあそれは良いんですけど、彼の言うことを聞いてあげた方がいいんじやないですか？急いでるんですね？」

俺とオールマイトのやりとりをソワソワしながら見ている少年に

話題を振ることにした。

そうしたらその少年は泣きそうな顔になりながら、オールマイトに思いをぶつけていた。

「無個性でも…ヒーローになれますか!? 無個性でも…貴方のようになりますか!?」

思つたよりも何気ない質問…に思えたが、その葛藤からして彼にとつては人生に関わる。夢に関わる大事な質問なのだろう。

そしてこの奇跡の出会いがこの少年の運命を変えることになると
は、まだ誰も知らない。

《この出会いがこの少年の運命を大きく変えると思われます》
(やめろ！ 雰囲気を壊すな！)

ヘドロ事件

「個性が無いせいで、そのせいだけじゃ無いかも知れないけど……ずっとバカにされてきて。だからかわかんないけど、人を助けるつてめちゃくちやかっこいいことだと思うんです。」

「恐れ知らずの笑顔で助けてくれる。貴方みたいな最高のヒーローに

！僕も！」

少年はその想いを全てオールマイトにぶつけていた。

そしたら突然、全て言い切つたくらいからオールマイトから煙がモクモクと出てきたのである。

『告。個体名：オールマイトは後遺症により満身創痍だと推測されます。その為、普段大衆に見せているオールマイトの姿は偽りの物かと思われます』

そんなことまでわかるかよラファエルさん……と少し恐怖を覚えながらラファエルさんに質問してみる。

（それじゃあもしかして回復薬を渡したのはオールマイトの傷を治す為？）

『是。しかし、個体名：オールマイトが弱っている姿を他人に見られるのは想定外でした。』
ラファエルさんとしては、他の人に見られるのは想定外だつたらしい。

だからあの時にフルポーションを渡すように言つたのか…

そして、ラファエルさんの言つた通り、オールマイトはいつもの筋肉質な姿の面影のないような骸骨のような姿になっていた。

当然その姿を見た少年は驚愕し、大声で叫んだ。

「うわああああ！萎んでるうううう！！」

その少年のことを見て俺は「はあ」とため息をつく。

そんな様子を見たオールマイトは右手に持つているフルポーションに目を移した後、俺にこう言つてきた。

「やはり君、私のこの姿のことに気付いていたんじゃないかな？」

「え、ええ。まあ…」

俺はなんて返すべきかわからず、曖昧な返事をしてしまった。

「見られたついでだ、少年少女。間違つてもネットには書き込むなよ。」

そう言うとオールマイトは自分の服を捲り、腹部の傷を見せる。

「5年前、敵の襲撃で負った傷だ。呼吸器官半壊、胃袋全摘、度重なる手術によつて憔悴してしまつてね。」

「私のヒーローとしての活動限界は、1日三時間ほどなのさ。」

衝撃の事実を告白するオールマイト。

「5年前つて、ドクドクチエーンソーと戦つた時、？」

「詳しいな…だがあんなチンピラにやられはしないさ。」

オールマイトはヴィランとの戦闘の際にこの傷を負つたらしい。もちろんそんなことが出来る人間など世界にも数えるほどしかないだろう。寧ろ俺はそんなことが出来る人間がこの世界にいるつてことに驚いたくらいだ。

だが俺には1人その人物について心当たりがある。

先程俺の脳内に流れてきた15年分の記憶の中にそれらしき人物がいたのだ。

通常、15年間の記憶を一度に受け取つてしまふと脳がパンクしてしまうのだが、こつちにはラファエルさんがいる為そんな心配は無用だ。

（なあラファエルさん。オールマイトを襲つた人物つて…）

『是。その可能性が最も高いと思われます。』

やはりな。確信が持てた為、俺はオールマイトに向かつてその名前を口にする。

A「!?!」「A
F O……」
オール・フォーウン

A「!?!」「A
F O。この世界の悪の帝王と呼ばれている人物であり、それと同時に俺のこの世界の父親を殺した人物ということになつてているらしい。

その名前を口にした途端、オールマイトはわかりやすく動搖した。本人としては抑えてるつもりなのだろうが、あまりに衝撃的だつたのか隠せていなかつた。

オールマイトは動搖しながらもこちらを睨んできた。

「少女…君は一体何者なんだ。その名前を一体どこで……」

オールマイトは俺のことをAFOの関係者だと疑つているのだろう。

そんなことでオールマイトと敵対したく無い俺は、その誤解を解くために記憶を辿り真実を伝える。

「実は……俺の父親はAFOに殺されたんです。でも警察はそれを事故として片付けてしまつたらしいです。AFOは裏社会の帝王とまで呼ばれているらしく、事件を書き替えたんだと思います。」

実際に俺が体験したわけでは無いため、それほど気にしている訳ではないが、オールマイトは申し訳なさそうに謝つてきた。

「すまない…辛いことを思い出させてしまつた。」

「いえいえ、気にしないでください。」

どうやら俺への疑いが晴れたらしく、俺としてはそれで満足だ。

「にしても君は本当に油断ならないね。恐らく出会つた時からこの傷のこともAFOのことも気づいていたんだろう？」

正確にはラファエルさんが、だけど俺はカツコつけて「勿論です。」と誤魔化しておいた。ラファエルさんから冷たい目で見られている気がするが、それは気のせいだろう。

「それじゃあこの青い液体も安全なものとして受け取つても良さそうだね。」

やはり受け取つてはいたが安全性に関しては疑つていたらしい。

そりやあ5年間治らなかつた傷が治るなんて言われても普通信じないもんね。

「騙されたと思つて飲んでみてください。ビックリしますよ！」

しかしそこで期待を裏切る俺では無い。

オールマイトはフルポーションをゴクゴクと全て飲み干した。

そして腹部の傷がどんどんと癒えていき、オールマイトの体はいつ

も通りの筋肉質な体へと戻つていった。

少年もこの光景を見て驚いていたのだが、一番驚いていたのはオールマイト本人だつた。まあ5年間も悩まされた怪我がこんなに一瞬で治つたとなつたらそりやあ誰だつて驚くか。

「し、信じられん…まさか本当に全て治つてしまつとは…、しかも摘出した胃袋や呼吸器官まで完璧に治つていいる…」

そう言わるとこちらも気分が良い。これでオールマイトは俺に一つ借りが出来た…なんて打算的な部分もないことはないが、純粹にオールマイトの怪我が治つてくれたのは嬉しい。

「本当にありがとう少女。なんてお礼をすれば良いか。」

にしてもここまで感謝されることは…俺的にはラファエルさんに言われた通りにしただけでここまで感謝されると罪悪感があるな。

「それじやあ頑張つてAFOを倒してください！応援します！」

と無難にその場を収め、この話を終わらせた。

これからもオールマイトと会うことはあるだろうし、この出来事はラッキーだったな。

そしてオールマイトは思い出したかのように少年の方を向く。

「すまん、話をが逸れてしまつたな少年。」

「プロはいつだつて命懸けさ。力が無くても成立するとは、とてもじや無いが言えないとね。」

「夢見るのは悪いことじや無い。ただ相応の現実を見なければな、少年。」

オールマイトはかなり厳しい意見を言つているがそれには俺も同意だ。無個性というだけで夢を諦めなければいけないのは理不尽なような気がするが、弱肉強食のこの世界で力なき者の綺麗事など戯言にすぎない。それを俺は前世で大切な仲間を失い、理解したつもりだ。

そう言いながらオールマイトは悲しそうな背中を見せながらどこかへ飛んでいつてしまつた。

少年は絶望したような顔をして階段を降りていつた。俺も声をかけようと思ったが、それはありがた迷惑というものだろうと思い家に

帰ることにした。

(今日は色々忙しい日だつたな。)

転生した初日であるにも関わらず、事件に巻き込まれたり、N.O. 1ヒーローと出会つたりと中々濃い一日を過ごしたような気がする。

俺としては元の世界が心残りではあるが、戻れる方法がないのなら考えても仕方ないだろう。そういうのはラファエルさんに任せれば良いのだ。

(それにしてもヒーローか、俺はそんな柄じや無いんだけどな…)
ふとそんなことを考える。

これからこの世界を生きるには目標が必要だと思つたんだが、ヒーローを目指すというのは身の丈に合つてない…というよりはヒーローになつた後のことをまだ何も考えていなかつたのだ。

ただ何も考えずにヒーローになつたところで意味がない。

そこで俺は、ヒーローになつた後のことについての目標を考えてみる。

まず最初に思い浮かんだのはA.F.Oへの復讐だ。

直接的ではないとはいえ、父親を殺した人物がこの世界のどこかで生きて いると言うのは気分のいい話ではない。

復讐と言つたら聞こえは悪いが、A.F.Oは悪の帝王とまで呼ばれて いる人物の為復讐すれば他の多くの人のためになるだろう。

そして二つめの目標としては、できるだけ自分が知名度の高いヒーローになることである。

それによつて元の世界への戻り方がわかる人間と出会えるかもしれないし、俺以外にも転生者…言い方を変えれば【異世界人】がきて いる可能性があると思う。その人と出会うきっかけとなるかもしれ ないから、知名度を上げるのは損がないだろう。

(それじゃあその為にまずは雄英を受けることを学校や親に連絡しな いとな…)

中学生3年生である(ことになつて いる)俺はそんなことを考える。母親は父が事故死して いる為ヒーローを目指すことに対し 少し

否定していたが、優しい母親なので説得すれば快く応援してくれるだろう。

そんなことを考えながら家に帰つてる時

突如爆発が起きた。

『告。この爆発の原因は先ほどのヘドロの敵^{ヴィラン}が原因であると推測されます。』

え？ だつてそれはオールマイトが処理していたじゃんか。

「否。討伐した際にペツトボトルをポケットへ入れておりましたが、先程転移魔法を使って合流した際には既に所持していおりませんでした。したがつて道中で落としていたと推測されます。』

は！？

もつと早く言えよ！と突つ込もうとした俺だが、ラファエルさんも馬鹿じやない。これにもなにか理由があるのだろう。…そう考えることにした。

急いで爆発した場所に移動してみると、そこにはラファエルさんの推測通り先ほどのヘドロの怪物がいた。

そしてそのヘドロを中心に、多くのプロヒーローが取り囲んでいるが流動的な個性である上に中学生を人質にとつていてる為誰も近づけない。

その為ヒーローは有利な個性のヒーローを待ち、周りに発生している火災等の被害を止めるしかない…という状況だ。
ベルゼビュート

ここはまた俺が出て暴食之王で喰い尽くす…というわけにはいかない。

さつきと違つて大衆が見ている前では言い逃れ出来ない。

プロヒーローの免許を持つている人間以外が個性を使うのは立派な犯罪となる。

つてかオールマイトはどこに行つたんだ？

オールマイトならもう既にヘドロを捕らえ損ねた事に気づいてるだろうし、もう活動限界が無いのだから駆けつけるはずなのである。とはいへ、この状況はちょっと…いや、かなりヤバい。

そんな時、俺の目には大衆の中にいる1人の少年が目に映る。口を抑えてるが今すぐにでも助けに走つてしまいそうな…そんな

危なつかしさがある、緑髪の少年。

そう、さつきの無個性の子だ。

『告。緑髪の少年と人質の少年は同じ学校だと推測されます。』

本当だ。制服が同じだし、そんな気がする。

だがそれが分かつたからといつても状況が変わらないまま…かのようと思われたが、そこで状況は動きだす。

気づいたときには既に、少年はヘドロへと突っ込んでいた。

「デ、デク！ 来るんじやねえ！ 無個性のくせによお！」
「き、君が…君が助けを求める顔してた…！」

それはほんの一瞬の出来事だつた。ヘドロが緑髪の少年を捕まえようとした瞬間にオールマイトが現れたのである。

「もう大丈夫だ少年。何故つて？ 私がきたあああ！」
「デトロイト・スマアアツシユ!!」

オールマイトの登場によつて状況は一変。

その一撃は火災すらも消し飛ばし、無事事件は解決したのである。

解き放たれし者

「君は、ヒーローになれる。」

ヘドロ事件から数時間が経つた。

緑髪の少年は無茶をしたことをプロヒーローに説教され、逆に人質にされた方はそのタフネスが評価され賞賛されていた。

そしてオールマイトはどううと、

報道陣に囮まれいたのだが、緑髪の少年を追いかけるべく取材者を撒いて逃げてきたらしい。

ん、俺か??

俺は今物陰に隠れてオールマイトを覗き見していることである。

一つオールマイトに聞きたいことがあつたのだが、どうやらそんな雰囲気でもなくなつていた上にオールマイトがかなり重大な秘密を暴露していたところに出くわしてしまつたので困惑している所である。

要約すると、オールマイトの個性は【O·F·A】ワン・フォー・オール先代から引き継がれきた個性らしく、名前からしてもAFOと何かしら繋がりがあるのは明白である。

そして次の繼承者が緑髪の少年である……ということだ。

「そろそろ出てきただうだ？少女。」

（バレてた――――――）

そう言われたら仕方ない。俺は物陰から出てオールマイトに姿を見せる。

どうやら少年にはバレてなかつたらしく、かなり驚かれている。

「えつと、どうして俺のことがバレてたんです？」

オールマイトが怒っているように見えたので恐る恐る何故バレたのか聞いてみる。

「まつたく…気配でそのくらいわかるさ。それで、何故ここに？」

流石N.O. 1ヒーローだな。と感心しつつ俺は気になつてきただことをズバリ聞いてみた。

「いや、ちょっと疑問に思つただけなんですが…ヘドロ事件の時、オー

ルマイトがかなり遅れていた気がして。別に責めてるとかそういうことじゃないんですけど…違和感があつて。」

「考えられるとしたら他のヴィランから足止めを食らつているとしか考えられなかつたんです…」

「なるほど、私を止めるのはAFOかその関係者…と踏んだのだけね。」

そう、俺が気になつていたのはそこだ。

なんせオールマイトを足止めなんて出来るのはAFOかその周辺のヴィランしか考えられない。

「結論から言おう少女。君の推測はほとんど当たつているよ。確かに私はあの時ヴィランから足止めを受けていたのだよ。」

「だが、恐らくAFOの仲間では無いと思う。」

「ん？ そうなのか。てつきり遅れたのはAFOの仕業だと思つていただけにそれは意外だつた。」

「そのヴィランとは軽く交戦しただけだが、情けない話だ。全く歯が立たなかつたしそのヴィランは全然本気じやなかつたんだよ。街に被害が出ないように私も本気を出さなかつたのは確かだが、あのヴィランは間違いなく私やAFOよりも強い。そう感じたのさ」
「なるほど…つてええ！」

マジかよ！

オールマイトとAFOつてこの世界では最強の2人じやなかつたのかよ！？

オールマイトが言うなら間違ひ無いんだろうけどさ！

「つてかオールマイト！ そんなことあるんですか！？」

「そりやあ驚いたさ。底が見えない強さというかなんというか…同じ人間とは思えなかつたらしく。」

まさかオールマイトがあつさりと自分より強いつて認めるヴィランつて…本当にこの世界の人間なのか疑わしいくらいだな…

『告。その可能性は非常に高いでしよう。』

ラファエルさんもやっぱりそう思うか。俺以外の人がこの世界に来ているつてのは朗報だが、ヴィランとなつてくると話は別だ。

ヒナタのときみたいに話が通じない可能性だつてあるし、仲間にす
る以前の問題だ。

「つてかそもそもなんで交戦になつたんですか？そのヴィランが何か
事件を起こしたとか？」

「いや、それがそういう訳じやなくてね。そのヴィランが『この新しい
体を試したい』と言つていきなり襲いかかってきてね。』

うーん。謎は深まるばかりだな。

「なるほど、ありがとうオールマイト。それじゃあ俺はそろそろ家に
帰るとするよ。」

別にこれで一生会えないなんてことはないだろう。そう内心思い
ながらオールマイトと少年に別れを告げる。

「あ、そうそう。君つて雄英志望なんじやない？」

俺は思い出したかのように少年に話しかけてみた。

「えつ、なんでわかつたんですか？」

「そりやああんだけオールマイトの方が好きならそうなんじやないか
なつて思つただけだよ。」

そんなことラファエルさんに頼らずとも俺にはわかる。
しかも彼はオールマイトの【後継者】なのだから。

「俺、リムル＝テンペスト。君と同じ中学3年生の雄英志望だよ。』

「ぼつ、僕！緑谷出久つて言います！」

彼は緊張でガチガチになりながらもちゃんと自己紹介をしてくれ
た。雄英志望同士、ここで会えたのはラッキーだつたと思う。

「それじゃあ、次会うときは雄英の入学式で！またね～』

そう言いながら俺は転移魔法を使い家に帰ることにした。

「ただいま」

「おかえり。遅かつたね。』

家に着くと、母が出迎えてくれた。

事件に巻き込まれた俺は帰りが遅れていたので、心配してくれていたのだろう。

母の名前は静江^{シズエ} テンペスト。

純の日本人であり、奇しくもシズさんと似ている。
しかも旧姓が伊沢^{イザワ}であるというのだから驚きだ。

俺の容姿がシズさんとそつくりである為、本当に親子って感じがする。

ちなみに父の名前はレオン^A テンペスト。前世のレオン^B クロムウエルとは全くの別人だが、容姿がほぼ同じだった。

前世ではあまり関係が良くない2人であつたが、この世界では本当に愛し合っていたそうだ。だからこそ、母は今でも少し寂しそうなときがある。心の傷というのはそう簡単に癒えるものではない。

シズさんとレオン^C：本当に運命だつたのかも、と思いつつ俺から話を切り出す。

「ねえ母さん。俺：雄英高校受けてもいい…かな？」

「リムル：ヒーローって仕事はいつ命を落とすかわからぬ危険な仕事なんだよ。」

シズさん：いや、母さんは少し涙ぐんでそう言つた。

大切な人を失つた母さんは私がいざれ命を落としてしまうのが心配で仕方のないのだと思う。

でも俺はヒーローになりたいんだ。

父の仇と仲間に会う為に。

「母さん、俺も父さんが死んで悲しかつたんだ。でも、プロのヒーローがいなかつたら俺は悲しむ間も無く死んでいたと思う。それで俺思うんだ：俺や母さんみたいに大切な人が死んで悲しむ人がいなくなつて欲しいなつて。」

「そんでき、俺のことは心配しなくて大丈夫だよ。立派なヒーローになつて母さんに楽させるから！」

俺は笑顔で言つた。

母さんに少しも心配させないために、もうあんな悲劇を繰り返さないために。

そんな俺の考えていることが伝わったのか、母さんは俺を泣きながら抱きしめてくれた。

「立派になつたね…リムル。ありがとう…」

ありがとうはこつちのセリフだよ。

この時、俺はこの人が親で本当に良かつたと心から思つた。

「リムルが雄英で頑張るなら、私も頑張らなきやね！」

母さんは涙を腕で拭いながら、そう言つてくれた。

こうして俺は10ヶ月後の高校受験に備えていくことにした。

雄英高校を目指すのは良いのだが、俺は一つだけ悩みがあつた。父が命を落としてから、母が女手一つで俺をここまで育ててくれた。それは前前世で一人暮らしだつた俺には想像絶するほどの苦労だつたのだと思う。

それに加え、俺が雄英に行くとなると更に苦労することになつてしまふのではないか…という懸念があつた。

現に母はさつき「私も頑張らなきや」と言つていたし、無理して倒れてしまうのではないか…そう考えてラファエルさんに相談することにした。

(ラファエルさん。母さんをなんとか楽させてあげることは出来ないか?)

『それなら提案があります』

流石ラファエルさん! それじゃあその提案を教えてくれ。

『個体名：ヴエルドラを封じる無限牢獄の解析鑑定が間もなく終了するからです。』

つてええ!! ヴエルドラがマジで解放可能なの!?

『マジです。』

何百年もかかるはずだったのに…凄いなラファエルさんは、『ヴエルドラを解放すれば、何かしらの職に労働させることが可能でしょう。』

つてかヴエルドラつて天災と言われるほどの大暴風龍。世界に四人しかいない世界最強の種族【竜種】の一匹。

そんなヴエルドラをこき使おうなんてラファエルさんはとんでもないな…

ただ、本当に頼もしい限りだな。そうと決まれば実行するとしよう

「……なら大丈夫かな。」

転移先は富士山の頂上。

日本で一番高い場所ならば流石にヴエルドラの衝撃を気にせず召喚できるだろう。

(にしてもあれから2年か、ようやく約束が果たせる。違う世界に連れてきて申し訳ないが…今解放してやるよ。ヴエルドラ!)

『告。無限牢獄の解析鑑定が終了しました。』

「ラファエル、俺の分身を作ってくれ。ヴエルドラの依代にする。」

『スキル【強化分身】を使用します』

ラファエルさんがそう言うと、黒い煙が出てきて俺の分身が作られた。

そして俺は、ヴエルドラの魂を依代となる分身に移動させる。

『告。主^{マスター}と個体名：ヴエルドラの魂の回廊の確立を確認しました。』

よし！成功だ！

俺の分身はどんどん体が大きくなり、髪色は金髪になつた。

その顔はイケメンで、どこかヴエルドラの面影がある。

「我！・ヴエルドラ＝テンペスト！完！全！復！活！逆らう者は皆殺しだあああ！！」

この日、数百年ぶりに暴風竜^{ヴエルドラ}が復活した。

ヴエルドラ日記

◆？また転生したら異世界だつた件◆？

むむむ：これは予測してない事態になつたな。

まさカリムルが異世界に転生してしまうとは、魔王への進化自体は成功しているようだが。

しかし何故転生したのだ？：いや、これに関しては考えてもわからぬことであろうな。我的勘がそう告げている。

それよりこの世界の景色だが、此処はリムルの記憶で見た景色となり似ているな。違いといえば人間の中にたまに異形なものが混ざっているくらいか。

うーむ、こう見ると結構リムルのいた世界とは違うのかもしれん。どうやらほとんどの人間にはユニクススキルの様なものが備わっているらしい。

現に線路の上でなんかデカい人が暴れてるし：リムルの前世ではこんなことはなかつたみたいだしな。あ、今は前前世か！

ん、なんだ？コレは。

リムルの脳内はこちらに筒抜けなのだが、急に大量の記憶が流れ込んできたようだ。それも15年分くらい。

なるほどな。これは恐らく“この世界のリムル”的記憶なのだろう。つまり“もしリムルがこの世界で生きていたら”というパラレルワールドのリムルということだな。

そしてこの記憶が来たということはリムルがこの世界に順応してきているということか？

まあこの世界は国籍だの個性届けだの面倒くさいルールが沢山あるようだからな！好都合よ！

しかし…これはなかなか凄惨な記憶だな。父を幼い頃に亡くしてしまうとは。父を殺したという奴もなかなか強さを持つていてるようだな。我には遠く及ばないが：イフリートくらいの強さはある気

がする。

ほほう…あがこの世界で最強と言われるオールマイトか。リムルの記憶にいるAFOとかいう奴と同じくらいの力と言う訳か。

「イフリートよ、貴様がコイツと戦つたら勝てそうか?」「わかりません。しかし、遠距離戦では私が有利。パワーが活きる近距離戦闘では不利といった感じでしよう。」

まあそういう感じだろうな。

我なら万に一度も負ける事はないが、この世界は人間しかおらぬ上にスキルという概念そのものが無いからな。それで上位精霊であるイフリートと同レベルなのを褒めるべきか。

しかし、何事もないように振る舞つておるが、かなり消耗しておるな。その少年やリムルは気づいておらんようだが我的の目は誤魔化せんぞ。

◆?ヘドロ事件◆?

「しかしリムルもお人好しだな。あんな少年のことなど放つておけば良いというのに。」

「いやいや、そうはいかないでしよう。あんな飛び立つていった人にしがみつく一般人の少年なんて危険すぎますし!」

「ふん!あの程度の高度から落ちるだけ死んでしまうような軟弱な体なのが悪いのだ。」

「無茶言わないでくださいよ…」

人間の体とは不便なものだ。飛べる訳でもなければ体も貧弱とはな。

「それはそうと、やはりあのオールマイトとやらはかなり無理していたようだな。」

腹の傷が深く、今じや筋肉が萎んで骸骨のようになつてしまつてる。

「なるほど!だからリムル様はハイポーションを!」

「今頃気づきおつたか。我は最初から気付いておつたぞ。」

「本当ですか？」

「うむ」

度々イフリートから疑われることがあるのだが、今回ばかりは本当であるぞ。

「話を聞いてみると、やはりオールマイトはAFOとやらとの戦闘でその傷を負つたようだな。」

「ええ、というかヴエルドラ様。オールマイトのポケットにさつきのヘドロが入つていないうような気がするんですが…」

「あ、ほんとだ。この人落としたねきつと。」

しかもこの場の全員がそれに気づいてないような感じだな。なんかオールマイトはフルポーション飲んで驚いとるし。「やつぱりこの世界ではフルポーションのような万能薬つてあんまり無いのかな？そこまで驚くことなかろう。」

「そうですね。リムル様の前世にも多少の怪我や傷を治すような仕組みがあつたようですが、それも限界があるのでしよう。」

「まあ我的場合は滅ぼされても復活するがな！クアーツハツハ！」

「話は変わるのでですがヴエルドラ様、この少年はかなり辛い人生を送つてきたようですね。プロヒーローへの憧れは人一倍強いにも関わらず、生まれつき個性がないというだけでその道が断たれてしまつているとは…」

「だが、それで諦めたのならソイツはここまでの人間だつたという事であろう。ユニーカスキルが戦闘に向かずとも、長い鍛錬を積めば人間の中なら最強クラスになつたという者だつておるのだから。大切なのは生まれ持つた才能ではなく、努力次第であろう。」「なるほど！流石ヴエルドラ様です！」

ま、我も才能あつてこそ強さであろうがな

ふう、にしてもこれでひと段落といったところか…ん？

「どうしました？ヴエルドラ様。」

「い、いや、なんと言うかな…」

何か嫌な予感…というかどんでもない気配がしたような。

「ラ、ラファエル様!?

コイツには逆らってはダメだと本能が告げておる…

「本日はどのような御用向きかな?」

「我、イフリートは貴方様に従う所存です。」

『是。種族名：イフリートは名前が与えられておらず、自我が貧弱です。そのためスキルを獲得する土台ができておりません。修行の再開を推奨します。』

「はい！私イフリートは修行の鬼となります！」

「あ、あのう…我は？」

「告。個体名：ヴエルドラはサボりすぎだと確信しました」

ギクウツ

『命。早急に究極能力^{アルティメットスキル}を獲得するように。』

え

「それはちょっと、無茶では？」

『可能です。演算能力を私が強制的に拡張しています。その状態を維持するよう努力し、無限牢獄の解析鑑定を行うように。』

『できますね？と聽かないということは「やれ」ということなのだな

⋮

「やるしかない…か。」

◆？解き放たれしもの◆？

ふう。やつと行つたか。これでリムルの方に集中出来るのだが…どうやらヘドロのやつはもう倒したようだな。

ほう、オールマイトは代々受け継がれた力【OFA】というスキルを持つてているようだな。それをあの少年に託す…そしてリムルの親の仇であるAFOを倒すための力ということか。

しかし、リムルのやつも中々鋭いことに気がつくものだな。オールマイトを足止めしている奴がいるなど全然考えてなかつたわ。

だがその質問のお陰でかなり重要なことが聞けたようだな。

オールマイトを足止め出来るやつなどこの世界にはAFOとやらしかおらぬだろうからな。

そして、もしオールマイトの話が本当なのだとしたらこの世界にリムル以外の転生者がこの世界に来ている可能性が高い。

特徴としては、上位精霊より圧倒的に強く、人間ではないと思われる程の強さ、（人間ではないのかもしれんが）そしてこの世界最強であろうオールマイトに真っ先に喧嘩を売る変わり者であり、「新しい体を試したい」と言うような奴か…そんな奴が居たような居ないような…：

「ま、考えておつても仕方ないな！ わからんものはわからん！」

「我はそんなことを考えてる暇はないのだ。早く無限牢獄の解析鑑定を行うとしよう。」

アレがこの世界のリムルの母親か…どうやら名前は静江と言い、その姿はリムルと瓜二つ…というよりもシズとやらにそつくりだな。「イフリートよ。貴様が憑依していたシズとかいうやつは確かにこの者にそつくりだつたよな？」

「ええ、私でも驚きなのですが。更にこの世界のリムル様の亡くなつてしまつた父親は『レオン・テンペスト』という名前らしく、私の召喚主である『レオン・クロムウェル』様にそつくりな見た目でした。」「ふむ、確かにその2人は前世でも運命的な出会いを果たしており、因縁があつたようだからな。この世界では上手くやっていたようだし、少しでも道が違えば前世でも2人は仲良くできたのかもしだねな。」「はい…私としては複雑な気持ちですが…」

「まあ過ぎてしまつたことは仕方のないことだ。丁度今リムルがこの世界のシズとやらを説得したみたいだし、この世界では守つてやらねばならぬな。」

「我がここを出るのもそう遠くはないはず。もし我がここを出たのなら、リムルが大好きなシズとやらを我が守つてやらねばな。」

「イフリートも前世のことは随分と気にしているようだし。」

「ついに獲得したぞ！ 究極能力究明之王をな！ これもりムルからの祝福ギフト」

「これでラファエル様から怒られずに済みますね。」

『問。究極能力を獲得しましたか？』

「はいっ！勿論ですとも！』

『それでは早く無限牢獄を破りましょう。』

「おおっ！外に出られるのですね！おめでとうござります、ヴエルドラさん。』

「まだ気が早いがな！クアーツハツハ！」

まずリムルと再開したら何を話そうか。

リムルの目の前でファウストを獲得したふりをするのが面白そうだな。

「おおつ！これがスキルの進化か！我的ユニークスキル究明者アルティメットスキルが究明之王ファウストに進化したぞ！我的飽くなき探究心が願う究極の真理に辿り着く力だな！」

と言えば

「すごいよヴエルドラ！そんなに簡単に究極能力を獲得するなんてやつぱりお前は大した奴だつたんだな！」

と褒め称えるだろうて！ハーツハツハツハ！

そしたらその後はあのAFOとかいう奴をぶつ飛ばしてみるかな。我がおしおきしてやるのも面白かろうて。

「ヴエルドラ様、忠告しておきますが…」

「む、何かな？」

「絶対に勝手な真似はしないほうがいいかと存じます。」

ギクッ

「確かに、ヴエルドラ様はとてもお強い。」

「うむ！」

「ですが、目立つのです。」

「まあな！」

「褒めてませんよ！へまあなではなくて、自重せねばならぬという話なのです。」

「ん？」

「もしかして、『コツソリAFOをぶつ飛ばそう』とか考えてません

よね？

え？ 考えてたけど…ダメだつたかな？

「そ、そんな事は考えておらんよ？」

「本当に？」

一無論だとも!

ここに押しきる 読めたら負けだと そういう気がした

「ならばいいのですが、心して聞いて下さい。ヴエルドラ様がリムル様の友として立つならば、ヴエルドラ様が何かしでかした責任も全てリムル様のせいにされる、と言う事を。【ありがた迷惑】という言葉があるらしいのですが、良かれと思つてした行動でも相手にとつては迷惑になる、という意味です。」

「リムル様から嫌われたら嫌でしょう?」

泣いちやうよね

くださ、約束ですよ！

「うむ、わかつた！ならば同時にもう一つ約束しておこう。」

「なんでしょう、ヴエルドラ様。」

「我が貴様をそう遠くないうちにそこから出してやろう。これが約束だ。」

「ありがとうございます！ その日を指折り数えて待つてます！」
「うむ。約束だぞ！」

私は力強く領き、イフリートと固く約束したのだった。

『命。個体名：ヴエルドラは主の為に身を粉にして働くよう^{マスター}に。』

むむむ……れかにておるれい
さてと……ようやく、か。

随分と早かつたな。リムル＝テンペスト。

数百年は覚悟していたと言うのに、わずか二年で終わるとは…

告
無限牢獄の解析鑑定が終了しました。

「ラファエル、俺の分身を作つてくれ。ヴエルドラの依代にする。」

『スキル【強化分身】を使用します』

リムルの声が聞こえてくる。無限牢獄を本当に打ち破つてしまふとはな…

我も人型で生活できるようだし、不自由しないだろうな。

『告。主マスターと個体名・ヴエルドラの魂の回廊の確立を確認しました。』

ふむ、成功だな。

「我！ヴエルドラ＝テンペスト！完！全！復！活！逆らう者は皆殺しだああああ！！」

我はこの日、異世界で復活を果たした。

イフリートよ。必ず約束、果たしてやるからな。

新ヒーロー「ファウスト」

「おい、おっさん。なんでそのセリフを知ってるんだ？、」

それって確か漫画のセリフだったよな？」

「クアーツハッハ！ 実は退屈だつたんでお前の記憶を解析してな。漫画とやらを読み込んでおつたのだ！」

「しかも将棋の腕は名人級…いや！ 暴風竜だけに竜王級であるぞ！」

いや、上手くねーよ。つてか誰と将棋なんてやつてたんだ？

俺の胃袋にいるやつといえば…イフリート！

全然話とか合わなそうなのになこの2人…

「まあ…胃袋生活を満喫していたようで何よりだよ。」

「リムルよ…折角復活したのに…素つ氣無いではないか…」

どんだけ面倒くさい性格してるんだよこのおっさん。

邪竜とか呼ばれてたのにまさかのツンデレか？

「だが思つてたよりはだいぶ早かつたな。礼を言うぞ！ リムル＝テンペスト！」

「我ズツ友よ！」

でも、本当良い性格してるよ。ヴエルドラは。

「なーにかズツ友だ、ネタが古いんだよ！」

俺は笑いながらそう言つた。

でも、本当に解放出来たんだな。

おかげり、ヴエルドラ。

あ、そうそう。

「お前には祝福は届かなかつたのかな？」

「よくぞ聞いてくれたあ！ 我のユニークスキル究明者が究名之王に進化したぞ！ 我の飽くなき探究心が願う究極の…」

おお、やつぱりそうか。俺の大賢者も究極能力の智慧之王に進化したもんなあ。

『是。それだけではなく、ヴエルドラの残種を解析したことで究極能

力《アルティメットスキル》である暴風之王を獲得しました。』

え、つてことはこれで究極能力が四つも！?

『そういうことです。』

「そういうことだリムル！今の我是無敵ぞ。大船に乗つたつもりでいるが良い！クアーツハツハ！」

「なあヴエルドラ。解放した途端に申し訳ないが頼みがあるんだ…」

「ふむ、貴様の母親のことだろう？我に任せておけ」

「え？ なんで分かつたんだ？」

「なんで分かつた？みたいな顔しておるなお主。そりやあ腹の中から見ていたからに決まってあるだろう」

いや見てたんかい！ てつきり見られてないと思つてたわ！」

まあそれなら話は早い…か。
「協力してくれるようで嬉しいよ。それで、ヴエルドラには働いて欲しいんだけど…」

そう、ずっと懸念していたことがあつたんだ。

ラファエルさんが有能になつたおかげでヴエルドラが解放出来たのは確かに喜ばしい。だけどこいつの性格上、何が起くるかわからぬいというかそもそも仕事できるのか？

「お前つて何が出来るんだ？」

ヴエルドラつてなんかやらかしそう…というよりどう考えてもコイツ不器用だろうし誰かの下で働くなんて絶対に無理だと思う。

やるにしても絶対に力仕事が良いとは思うんだけど…どんな仕事なら安心して任せられるのやら。

「ふむ、何やら貴様が失礼なことを考へてゐるようだがそれは置いておいて…選択肢など一つしかあるまい。」

ん？ 選択肢つてまさか…

「無論！ プロヒーローを目指す「却下！」

ダメに決まつてるだろ！ そんなに目立つ職業をやつたらどうなるか分かつたもんじやない。

「それじやあ何か良い案があるのか？ 言つておくが、我はあるのパソコンとか言うやつは使えぬぞ。」

ぐぬぬ、悔しいけどプロヒーローが一番理にかなつてるんだよな。

ヴエルドラの強さならどんなヴィランにも負けないだろうし、個性と称すれば力は使いたい放題。

ヴィランを退治するだけで金が入ってくるわけだし。

しかもヴエルドラ本人がこれだけやる気があるなら断れない。

俺は逆にヴエルドラにはヒーローになつてもらわねば困るということに気が付いた。

だが問題は山のようにある。

まず一つ目はヴエルドラの存在についてだ。

俺と違つてヴエルドラは戸籍がないし、この世界にいたという証拠もない。まあ実際いなかつたんだから当たり前だが。

そして、二つ目は一つ目の延長線上にあるんだが、そんな状態で果たしてヒーローになれるのか…そもそもこの世界で一般人がヒーローになれる制度があるのか？

『是。それら点については心配無用です。個体名・ヴエルドラの戸籍、及び個性届を政府に提出しました。そして、公安が認めるヒーロー試験に合格することが出来ればヒーローとして活動することが認められます。』

いやいや、ちょっと待て。

なんで勝手にヴエルドラの戸籍作つてるの？この人。

『それが最適かつ効率的だと判断しました。』

うん、もう突つ込むのはやめよう。

（それでラファエルさん。そのヒーロー試験つてのはいつあるんだ？）

『明日です。』

え、明日！？

「なあヴエルドラ。この世界でヒーローになるにはヒーロー試験つてやつに合格しなければならない。それでなんだが…急で悪いんだけど明日その試験を受けてもらうよ。」

「ふむ、よかろう。待ち遠しかつたから丁度いいというものだ。」

これで一気に二つ問題が解決したんだが…あと一つは、、

「ただいま。母さん」

「あら、おかえり。リムル：と、どちら様？」

そう、母さんになんて説明しようか：それが三つ目の最後の問題だ。

「クアーツハツハ！ 我は暴風竜ヴエルドラ！ このテンペスト一家の救世主となつてやろう！」

そんなヴエルドラを見て母さんはポカーンとしている。

まあ当たり前だ。

「ま、まあ順を追つて説明するから！ ヴエルドラもちよつと静かにしてて。」

俺はヴエルドラにここに来てもらつた理由を説明した。

母さんに無理をさせない為であること、ヴエルドラは力がありヒーロー志望なのだが住み家がない為、同居するのは利害の一致であることを。この二つを母さんに伝えた。

「話は分かつたわ、リムル。でもヴエルドラさんは大丈夫なのかしら。私としては手伝つてくれたり働いてくれたりするのは嬉しいのだけれど、ヴエルドラさんだつて本当は帰るべき場所だつたり待つている人がいるんじゃない？」

そう心配する母さんに対してヴエルドラは笑つて答えた。

「クアーツハツハ！ 確かに我的ことを待つてゐる者もいるかもしだ。しかし！ 我とリムルは盟友である！ そんな盟友の頼みを断るわけなかろう。我は約束は守る主義なのだ。」

そんなヴエルドラを見て母さんは「ありがとう。」と言つて受け入れた。

こうして俺が心配していた問題についてはヴエルドラのヒーロー試験のみとなつた。

翌日

ヴエルドラはヒーロー試験会場へと向かつた。

俺と母さんはヴエルドラを見送つた後、一緒にゆつくり家で合格を願うこととした。

「リムル、とつても良い友達を持ったわね。」

そう言われとき、少し照れながらも

「ヴエルドラは自慢の友達だよ。怖がる人も沢山いるけど、本当にいい奴なんだ。今回だつてあんな感じだけど、母さんを助ける為ならなんだつてするって言つてたんだよ？」

そう言つた。ヴエルドラは本当に不器用なやつだけど、本当に良い奴。母さんにもそれが伝わつていたらしい。

安心しながら自室に戻ると、雄英高校の過去問を机に広げてみた。ヒーロー科とはいえ偏差値79の超難関高校。

まあラファエルさんに頼れば大丈夫とは思いながらも一応自力で解いてみる…のだが全く分からん、

そりゃあ前世では高校受験も大学受験もしているが、別に超一流だつたわけではないし、それはもう十年以上前の話だ。

勉強の内容なんて普通忘れてるだろう。

ため息を吐きながら俺はラファエルさんにオートモードに切り替える。

するとペンがすらすらと動き出した。

その後、ものの数分で解き終わつてしまつた。

自己採点をしたら勿論満点だつた。当たり前だが量子コンピュータすら凌駕するラファエルさんなら高校生の問題どころか大学…いや、この世の真理すら解明出来そうだ。

中学三年生の受験生だというのに全く勉強する必要がないとは…：そんなこんなで勉強のモチベーションが下がりつつ、今日の受験勉強は終わることにした。

気がつけばもう夕方。俺はなんやかんや勉強に没頭していたらしく、前世では娯楽がほとんど無かつたからか、楽しみながら勉学に励むことができた。

そろそろ夕飯かという時、ヴエルドラが勢いよくドアを開けた！

「我！・帰還！」

顔を見ればわかる。絶対ヒーロー試験受かつただろ。

そうは思いながらもヴエルドラに聞いてみる。

「おかえりヴエルドラ。ヒーロー試験はどうだつた？」

そう聞くとヴエルドラは「待つてました！」みたいな顔をしながらドヤ顔でヒーロー免許を見せつけてきた。

「クアーッハッハ！ 我にかかればこんなものよ！」

そこにはヒーロー名「ファウスト」と書かれていた。

おお、本当にプロヒーローになつたんだな。

「おめでとう、ヴエルドラさん。」

後ろから母さんが歩いてそう言つてきた。

「うむ、これでこの家も安泰だな！ 大船に乗つたつもりでいるが良い。」

そんなヴエルドラを見て母さんは微笑みながらも「ありがとう」って言つた。それでヴエルドラはさらに笑顔になつていた。

「でもヒーロー試験つて何やつたんだ？」

「なあに、簡単な筆記と実技試験だけだつたわ。我にかかればこんなもの楽勝だがな！」

おお、実技は心配していなかつたが筆記試験も突破するとは…実はヴエルドラつて実は頭いいのか？
『否。個体名・ヴエルドラとは意思疎通が使用可能である為、私が全て解きました。』

なーんだそういうことね。

「実技試験は特に簡単だつたな！ 軟弱なヒーローと一対一の実践形式だつたのだが、一撃で沈めてやつたわ！」

「そりやあ…そのヒーローも災難だつたな。」

正直ヴエルドラに勝てる奴なんて俺含めてこの世界には1人もいないだろう。

「でもヴエルドラさん、私のことを想つてくれるのは嬉しいけれど、無理をし過ぎちゃダメですよ？」

「ふん！ 貴様がそれを言うか。だが安心しろ、このヴエルドラの辞書に無理をするなどという言葉ない！」

こういう時のヴエルドラは頬もしいな、本当に大黒柱つて感じがす

るよ。

俺達はその後ヴエルドラのヒーロー試験合格祝いとして母さんがいつもより豪華な夜食を用意してくれた。

とんでもない勢いで料理をかきこむヴエルドラを見ながら俺は苦笑いしながら。母さんは微笑んでいた。

こんな毎日が続いてほしい、俺は内心そう思いながら今日もベットに眠る。俺とヴエルドラで母さんを支えなきやな。

雄英高校試験

ヴエルドラがヒーローの資格を取つた日の翌日。

俺は朝から学校に行つていたのだが、ヴエルドラはその間に事件を数十件も解決していたらしい。

常人の数百倍のスピードで移動することができるヴエルドラなら並のヒーローとは比べ物にならないくらいの効率で仕事が出来るのはわかつていたが、それにしてもここまでとは…

学校から帰ってきた俺はヴエルドラの仕事ぶりを少し見学してみることにした。

「なあヴエルドラ。次の仕事は一体どんな感じなんだ？」

「ふむ、実は次やろうと思つてたのはさつきまでのヴィラン退治とは少し違うのだリムルよ。どうやら近所の公園に大量にごみが廃棄されているようでな。我がそこに行つて掃除してやろうというところなのだ。」

なるほど、要はゴミ掃除か。

ただヴィランを殴りたいだけかと思つていただけに俺は少しヴエルドラに感心した。ここまで根までヒーローになつてるとは思わなかつたのだ。

ちなみにその海浜公園ではごみが不法投棄されており、住民の方も見てみぬふりをしているらしい。

「しかし！」このヴエルドラの能力を使えばゴミなど一瞬で吹き飛ばせるわ！」

「確かにね。それじゃあ一緒に行くか。」

俺達は転移魔法を起動し、海浜公園へ向かった。

「公園の入り口まで運ぶんだー！トラックに詰め込め！」

ん？あれはオールマイトと緑谷くんだ。何故ここに居るんだろう。

どうやら緑谷くんが掃除していてオールマイトが掃除をしているみたいだね。話を聞いてみるとしよう。

「おーいオールマイトー！緑谷くーん！」

「む、この声は…リムル少女！と、その隣の方は？」

「リムルさん！と…あ、貴方は！今話題沸騰中の新ヒーローファウストさん！」

緑谷くんはヴエルドラのことを知つてゐようだな。つて話題沸騰中なの？

「え、話題になつてるの？」

俺が恐る恐る聞いたら緑谷は熱くなつて早口で答える

「うん！昨日のヒーロー試験でのN.O. 2エンデヴァーを一撃で倒してプロになつた今大注目の超新星だよ！」

ふーん、そなんだ：つて待て待て待て。

「え、ヴエルドラが一撃で沈めたつて言つてたヒーローつてエンデヴァーだつたの？」

「うーむ…確かにそんな感じの名前だつた気がするな。まあ威勢だけはよかつたが大したことない方だけな奴だつたわ！」

まあそりやあ実力差考えたらそうだろうけどさ。

「まつたく…そりやあ話題になるわ。」

「でもなんでリムルさんとファウストがここに？」

あ、そういうえば俺ら掃除しにここに来たんだつた。エンデヴァーだつたことの衝撃で忘れていたよ。

「実は俺らこの海浜公園の掃除をしに来たんだけどね。でもどうやらそれは緑谷くんがやつてくれそしだから無駄足だつたかな？」

わざとらしく俺はオールマイトと緑谷に聞いてみる。まあ俺達に任せてくくれてもオールマイト達が鍛練に利用してくれてもどつちでも良いんだけどね。

「うーんそだな…ではこちらに任せて頂きたいかな。」

オールマイトは考えながらそう答えた。

「分かつたよ。それじやあ俺たちは引き上げようか、ヴエルドラ。」

「うむ、それでは達者でな！オールマイトとやら。」

最後に挨拶をした後、俺は転移魔法を発動させ家に帰ることにした。

そして、ヴエルドラの仕事ぶりを見るためにパトロールを見学して

いたのだが、流石の一言だ。

ヴエルドラの飛行速度は恐ろしいほどに速く、俺でもついていくのに精一杯だった。そして視認できるヴィランを片つ端から一撃で倒していく。

そして悲鳴があつたらすぐに助けに行く。

その姿はオールマイトやエンデヴァーといったプロヒーローと比べても遜色ない：いや、移動速度を考えれば救助人数はトップヒーローよりも多いかも知れない。

前世ならこんなこと無かつただろうが、どうやらヴエルドラはチヤホヤされるのが好きらしい。お札を言われた後にヴエルドラはあからさまに機嫌が良くなっている。

なるほど：だからコイツはあんなにヒーローになりたがっていたのか。

だが、動機はどうあれこれは本当に天職だつたのかもしれない。ヴエルドラはあつという間にトップヒーローへと上り詰めるだろうからね。勿論そうなれば経済面に関しても期待して良いだろう。年収数億：いや数十億とかになるかも知れない：なんて考えると俺は期待で胸が膨らむ。

ヴエルドラの今後に期待だな。

話は少し飛ぶが、10ヶ月の時が経った。

この10ヶ月は本当にあつという間に過ぎていった。この世界にも大分慣れていった：というか前前世の世界と個性の有無以外にはそこまで違いは無いからね。

ちなみにこの10ヶ月の間にはまあ色々なことがあった。

どうやら半年に一回、【ヒーロービルボードチャートJP】というビックイベントがあるらしい。

簡単に言えば全国のヒーローに順位を付けて格付けする。

支持率、事件解決数、社会貢献度を基準に順位を付けるシステムなんだそうだ。トップに行けば行くほど、国民の平和と安心を守つてい

るヒーローということになる。

ヴエルドラはエンデヴァアーに次ぐ3位という十分すぎる結果だった。まあ本人は1位になれず悔しがっていたのだが。

勿論デビュ―して数ヶ月で3位というのは異例中の異例。

しかも事件解決数は2位のエンデヴァアーとダブルスコアというダントツ1位だつたのだが、知名度はまだ低かつた為支持率が足を引つ張つた結果3位に落ち着いたといった感じだ。

勿論、今回の結果でヴエルドラの知名度は全国区で知られる程のヒーローとなつたので次回は1位を狙えるだろう。

そして今日は待ちに待つた雄英高校の入試試験!!
俺はようやくかと思いウキウキになりながら会場へ向かつていつた。

家を出る時、母さんは「いつてらつしやい」と言ってくれて、ヴエルドラは「絶対に合格するのだぞ! 我のようにな。クアーツハツハ!」と笑い飛ばしていた。やかましいわ。

そんなこんなで雄英の会場に着いた。

落ちる気は微塵もないが、校門を前にしてホツと深呼吸しながら校内へと入つていく。

そして試験説明会場へとたどり着いた

「今日は俺のLiveへようこそー! everybody say
Hey!!」

声でけえしテンション高えなあの人:

『あれはボイスヒーロー【プレゼント・マイク】です。』

ふむふむ、そんなことも知つてゐるのかラファエルさんは。

そこからは長つたらしい説明が続いた。

簡単にまとめると

- 各自指定の練習場にて行う
- 練習場には仮想ヴィランを多数配置してある。三種存在してお
り、攻略難易度に応じてポイントが変わる
- 他人への妨害等の行為は御法度

今のところこんな所だ

「質問よろしいでしようか！」

説明中だと、いうのに急に質問をしたがつてゐるやつがいるな。

眼鏡の長身でいかにも頭が良さそうな優等生つて感じの子だね。

「プリントには四種のヴィランが掲載されています。誤載であれば、日本最高峰の雄英において恥すべき事態！」

「ついでにそこの縮毛の君！先程からボソボソと：気が散る！物見遊山のつもりなら即刻、ここから去りたまえ！」

ほう、なるほど確かにプリントには四種のヴィランが掲載されています：がこれって絶対今から説明することだろ。早とちりすぎないか？

つてか縮毛つてよく見たら緑谷くんの事か。ヒーローオタクのは良いけど、度が過ぎるのは良くないな全く：

「O K O K。受験番号711くん、N I C E なお便りサンキューな。四種目のヴィランはO P。ソイツは言わばお邪魔虫。各試験会場で一体大暴れしているギミックよ。倒せないことは無いが、倒しても意味はない。リスナーにはうまく避けることをお勧めするぜ？」

「ありがとうございます！失礼しました！」

「俺からは以上だ。最後にリスナーには、我が校の校訓をプレゼントしよう。かの英雄、ナポレオン・ボナパルトは言つた。『眞の英雄とは人生の不幸を乗り越えていくもの』と。更に向こうへ、P u l s U l t r a！」

ようやく長つたらしい説明が終わつたな。

「それでは皆、良い受難を」

俺は試験会場Cだつた。ちなみに緑谷くんはBに向かつていつたから、恐らく違う会場だろう。

ちなみに作戦はもう既に考へてある。ラファエルさんに確認したところ問題なさそうだつからまあ大丈夫だろう。

「はいスタート」

ん？

「どーしたどーしたー！本番にはカウントダウンなんかねーんだよ。賽は投げられてんぞ？」

プレゼントマイクがそう言うと受験者達は一気に走り出した。
ま、俺はそんなに焦る必要もないしのんびりやるか。

「おいおいお前聞いてんのか！走れ走れ！」

プレゼントマイクはこちらを向いて怒鳴つているから返事くらいはしておくか。

「分かつてますよ。そんなに焦んないでくださいな。」

そう言いながら俺は羽でフワフワと上空へ浮かんでいく。
(この技をまた使うことになるとはな…)

巨大な魔法陣を展開させ、広大な面積の試験会場の隅々にまで水滴をポタポタと垂らしていく。

そろそろ水滴が各地に散らばつただろうか。

そう思い俺はこう叫ぶ

「神之怒!!」
メギド

他の受験生を傷つけず、ロボットの核のみを貫き次々と破壊していく。前の俺ではこんなことは出来なかつたのだが、覚醒魔王となつた俺は以前使つた時とは比べ物にならないほどの膨大な魔素をコントロールすることができるようになつていた。

他の受験生に1Pも与えることさえも許さず、次々と屈折した光線がロボットを破壊していく。

そして全てのロボットを破壊した頃、満を辞して現れた0Pの巨大ヴィラン。しかし、そんな0Pすらも無情にも核を貫き一撃で破壊してしまつた。

「終了——」

完全に全ての仮想ヴィランを破壊したところで数分の時間を残したところで強制的に試験は終了した。

試験開始から1分も経たずに試験が終わつたなんて前代未聞：というか時間を残して全ての仮想ヴィランが破壊されたこと 자체が想定外であり史上初なのだ。

会場内の受験生達が俺の事を変な目で見てくるが、別に俺は君たち

が試験に不合格だつたとしても知つたことではない。この世は弱肉強食、早い者勝ちだからね。

あれから一週間経つた。

母さんはソワソワしながら合格発表を待つていたのに対し、俺とヴエルドラは全く心配していなかつた。

まあ母さんがソワソワしてる姿が可愛かつたもんだから、試験の手応えとかは全く伝えていない。流石にイタズラが過ぎたかな？ 反省するとしよう。

「リムル！ 手紙来てたよ！」

お、やつとか。雄英からの合格通知。

母さんも一緒に見ようと提案したのだが、まずは1人で見るべきだと言われ、俺は渋々部屋の中で1人で封筒を開けた。中には小型のプロジェクターが入つていたため、起動ボタンを押す。

『私が投影されたああ！』

そこに映されたのはいるはずのない N^オO^ル 1 ヒー^マロ^ト。

これには流石の俺も予測出来ずに驚かされた。

『いやーすまないすまない。思つたよりも手続きに時間がかかつてしまつて…』

『私がここにいるのは他でもない！ 来年度からは雄英高校ヒーロー科の教師となることになつたからだ！』

えええ！ マジでか！

そんな事前会つた時にも言つてなかつたじやんか！

まあその時はヴエルドラに全部話題を持つていかれたから仕方がない…としよう。

『筆記試験に関しては全教科満点で合格。凄いね君！ どんな頭脳を持ち合わせたらこうなるんだい！』

まあラファエルさんの力を借りたらそりやあこうなりますわ。恐らく俺が自力で解いたとしても合格点ギリギリくらいだつただろうからラファエルさんのお陰で安心しながら試験ができたんだよな。

『そして実技試験に関してだが…まさか全ての仮想ヴィランを一人で倒してしまうなんて想定外だつたよ！その記録はなんと500P！

2位の77Pと大差をつけて堂々の主席だよ!』

まあそりやあそうだろうね。にしんでもない記録を叩き出したんだな。

『まあ実は救助活動ポイントなるものも存在していたんだが、全ての仮想ヴィランが一瞬で壊されちゃったからね。よつて誰も困らなかつたので残念ながら0Pだ!』

いやいやそんなどあるのかよ！

俺は笑いながら液晶越しのオーリルマイトに突っ込んだ。

『とはいえる。それが悪いわけじゃない。今回に関しては誰も怪我を負わず、助けるまでもなかつた。もし現場だつたらそんな状況が一番理想的だからね。素晴らしい判断だつたよ。リムル少女！』

個性把握テスト

「実技総合成績出ました。」

「ここは雄英高校ヒーロー科の会議室であり、職員達が会議をする真っ只中である。」

「レスキューP0で2位とはねえ。」

「仮想ヴィランは標的を捕捉し、近寄つてくる。後半他が鈍つしていく中、派手な個性で迎撃し続けた。タフネスの賜物だ。」

「対照的にヴィランP0で8位…」

「大型ヴィランに立ち向かつたつてのは過去にもいたけど…ぶつ飛ばしちゃつたつてのは久しく見てないねー。」

こんな感じで職員達は生徒について意見を言い合っている。

「そして…試験会場の全ヴィランを狩り尽くして500P…」

職員達はリプレイ映像を見てため息をつく。

「まさかこんなことになるなんて想定してなかつたな…」

「いや、そこじゃないだろ。どんな個性を持つていたらこんなことが可能になるんだ？」

「はい、それなんですが…どうやら個性届には【スライム】としか記載がされておりませんでした。スライムになれるという個性なのは判明しておりますがそれ以外は…」

職員の一人は困惑しながらそう話す。

それを聞いた職員達もまた、困惑しながら聞いていた。

使用中に叫んでいたため命名された【神之怒^{メガド}】という技とスライムにはなんの関連性もない。

「それにしても強力な技だ…ヴィランじゃなくて本当に良かつたよ。」「ああ、もしこの技が街中で放たれれば都市の壊滅は免れない。それに止めれるプロヒーローもいないだろうからね。」

そしてそんな中オールマイトが口を開く。

「実は私…このリムル少女と少し面識があつてね。彼女はあのファウストの知り合いらしい。詳しい関係はわからないが、かなり親密な仲

らしいよ。」

その言葉を聞いた職員達は驚愕しながらも少し納得していたようだつた。

ファウストというヒーローはかなり出鱈目な強さで有名なヒーローであり、ルーキーにも関わらずN.O. 3ヒーローなのだ。

そんな彼も素性は謎な部分が多い。丁度リムルと同じように。

「こんなことは話すもんじやないが、話したほうが納得できると思つたね。」

「なるほど。それじゃあこの話題は置いておくとして、これじやあ他の受験生が可哀想過ぎないか？」

そう嘆く職員に対し、ネズミのような生物が答える。

「それについては心配無用さ！リムル少女に帰つてもらつた後にもう一度試験会場Cでは同じように試験をやつたからね。」

本来ならこういうことは無いが、流石にこれは例外だつたのだろう。

「そして今年だけ！異例中の異例でクラスの人数を1—A組だけ21人にしたのさ！」

これもりムルの影響だろう。今回も例年同様1クラス20人だったのだが、優秀な生徒が多いため21人となつたそうだ

A組と書かれたクラスを見つけた。
(いやドアデカ過ぎでしょ。)

異形系個性を考慮した結果だろうか？

俺はそんな事を考えながらドアを開ける

「君！机に足を置くな！雄英の先輩方が使つていた机だぞ！申し訳無いと思わないのか!?」

「あ？思わねえよ端役！お前どこ中だ！」

「ぼ：俺は私立聰明中学出身！飯田天哉だ！」

「聰明？糞エリートじやねえか！ぶつ殺しがいがありそうだな！」

「ぶつ殺しがい!? 君口悪いな!? 本当にヒーローを目指してるのかい!?

なんだこの光景は…と少し戸惑いながらも俺は教室に入る

威張つていてる方はヘドロ事件の被害者である【爆豪勝己】だつたか。それで怒つていてる方は試験会場で質問をしていた子か、名前は【飯田天哉】というらしい。

自分の机に座り、数分経つたら緑谷くんが入ってきた。

それに気付いた飯田くんが緑谷くんに近づいていつて何か話をしているのだが、遠くてよく聞こえない。

「友達作りたいなら他所へ行け……こは、ヒーロー科だぞ。」

寝袋に入りながらいかにも寝不足つて感じの人�がゼリー飲みながら説教してきた。

「はい、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠けるね。担任の相澤消太だ、よろしく。」

なんだよあのオッサン…とか考えてたらラフアエルさんが反応した。

『彼はヒーローである【レイザーヘッド】だと推測されます。』

レイザーヘッド…聞いたことない名前だな…

『レイザーヘッドはメディア露出を極端に嫌つており、その素顔を見たことがある人間は非常に少ないです。』

へーなるほどね。

「早速だが体操服着てグラウンド出ろ。」

急すぎるつて、と戸惑いながらも文句垂れてても仕方ないため急いで着替えてグラウンドへ向かつた。

「個性把握テストオオオ!?」

「入学式は!? ガイダンスは!?」

「ヒーローになるなら、そんな悠長な行事、出る時間はないよ」

いやいやいやおかしいだろ、と俺が心の中で思いつつもまあ仕方がないので従うこととした。

「雄英は『自由な校風』が売り文句、それは生徒だけではなく先生側も

また然り。お前達も中学の頃にやつただろう？ 個性禁止の体力テスト。今からやる8種目の競技をお前達にはやつてもらう。」

相澤はニヤリと笑いながらそんな暴論を口にした。

「おいリムル、中学の時ボール投げ何mだった？」

「え、それは恥ずかしいなちよつと。俺はこの世界では運動が苦手だつたことになつてゐんだから。」

「じゅつ…18mです…」

俺は顔少し赤くし、相澤から目を逸らしながらそう言つた。
「まあ女子高生ならそんなもんだろう。そんじゃあ今ここで投げてみろ、『個性あり』で。」

なるほど…そういう魂胆ね。この世界ではヒーロー以外は基本的には個性の使用は禁止されている。勿論それは体力テストでも例外じゃない訳なんだが、ここは雄英のヒーロー科だ。

「わかりました。」

俺はハンドボールを相澤先生から受け取り、暴風之王^{ヴァエルドラ}を発動させる。

まさしく天災と言える程の暴風のエネルギーを右手に集め、ハンドボールにその火力を上乗せして思いつきり投げ飛ばした。

「…ほう。？か…」

相澤先生はそう呟きながらタイマーを見ていた。
「すつげー面白そう！」

「個性使えるのかよ！」

おいおいみんな調子に乗りすぎだつて…

そりやあ個性使えるのは嬉しいだろうけどさ、相澤先生ちよつといライラしてゐるし。

「面白そう…か。君達はこの三年間をそんな腹づもりで過ごす氣でいるのかい？」

そう言つて相澤先生は俺たちを威圧してくる。

こりやあなんかとんでもないことを言う予感…とか考えてたら本当にとんでもないことを言つてきた。

「よし、それじやあこの体力テストでトータル最下位だつた者は見込

みなしとして除籍しよう。」

はあああ!?

そんなの理不尽なんてもんじゃないが、俺たちは誰一人反論することができなかつた。

俺達はまだ高校一年生。場数を踏んだプロのヒーローに意見を言う気にはなれずに体力テストが始まつてしまつた。

1種目目 50m走

これは楽勝かなと思いつつ、俺はスタート位置に立ち転移魔法を起動する。

スタートの合図と同時にゴール地点へ転移した。

記録は測定不能と診断された。

どうやら座標が50m間に存在しなかつたのが原因らしい。

とはいえ相澤先生に記録自体は認められたので問題なかろう

2種目目 握力

さつき俺は運動が苦手と言つたが、それはあくまでも俺がこの世界に来る前の俺の話だ。

覚醒魔王となつて身体能力が10倍以上となつた今は身体能力はヴエルドラの次に高いと思う。

思いつきり握力計を握つた。

『バキッ』

なんか今鳴つちやいけない音がなつた気がする。

恐る恐る握力計を見てみると、ネジが数本外れており故障している握力計があつた。

これもまた計測不能とは…そりやあ良い結果?を出せたのは嬉しいんだが、皆からの視線が痛い。か弱い女の子だと思われていたから尚更。

俺は恥ずかしくなつて急ぎ足で次の種目へ向かつた。

3種目目 立ち幅跳び

これは楽勝かなと思いつつジャイアントバットの羽根を生やしながら滑空する。まあ空を飛べるってのはそんに珍しくない気もするが、

相澤先生もそんなに驚いた顔もせず?と表示されたタイマーを手に持っている。いや、ちょっと呆れてるかな?

4種目目 反復横跳び

流石にこんなの普通にやるしかないか。特にスキルを起動する訳でもなく、無難に終わらせた。

記録は62回

5種目目 ソフトボール投げ

俺はさつき投げた為この種目は免除となつた。

それじゃあと思つてゆつくりと見学しようと思つたんだが、どうやらそれどころじゃないらしい。

「個性を消した。つくづくあの入試は合理性に欠くよ。お前のような奴も入学できてしまう」

どうやら緑谷くんと相澤先生が揉めている…というか相澤先生が警告を出しているのか。

「消した…！あのゴーグル…そ…うか！視ただけで人の個性を抹消する個性！抹消ヒーロー・レイザーヘッド！」

本当にレイザーヘッドって名前のヒーローなんだな相澤先生。ラファエルさんは流石の推測能力つてところだ。

「個性は戻した…ボール投げは2回だ。とつとと済ませな」

相澤先生は捕縛を解き、緑谷くんは円の中に立つ。

『課題名：相澤消太は緑谷が個性を発動したとしてもしなかつたとしても除籍処分とするでしょう。』

まあそうだろうな、悔しいが現実なんてそんなもんだ。

緑谷くんは縁があるから助けてやりたいが、このくらい彼の力で切り抜けるべきだろ。そうじやなきやN.O. 1どころかヒーローとしてやつていかないと。

そして緑谷くんは覚悟を決めたような顔となつた。どうやら玉碎覚悟の個性使用つてどこか。だがしかし、普通にやつてもダメだ。緑

谷くんの体がボロボロになつてしまい耐えきれず他の種目どころでなくなってしまう。

「S M A S H!!」

叫び声と共にボールは遙か彼方まで飛んでいった。そしてその記録は705.2mといった驚きの結果となつた。

しかも緑谷は大怪我をしておらず、腫れ上がっているのは右手の人差し指だけであり、最小限の被害で最大限のパフォーマンスをしてみせたのだつた。

「先生、まだ：動けます！」

少し涙目になつてゐるが、まだまだやる気なようだつた。

相澤先生も除籍する気が少しは変わつたようだし、この場を乗り切つた緑谷くんは正直よくやつたと思う。

そんな賞賛の意味を込めたご褒美として俺は右手からフルボーリョンを放出し、緑谷くんの負傷部分にかけた。

右手の人差し指の腫れがみると治つていく訳なんだが、それを見たクラスメイト達が驚いた顔でこつちを見てくる。

目立ちはなかつたが、まあ怪我人が出たなら仕方ないしそつちを優先するよ。

「どーゆー訳だデク！てめえ！」

クラスメイトの一人が緑谷めがけて全速力で走つてきたので俺は慌てて鋼糸を使ってそのクラスメイトの動きを止めた。

「ふう危ない危ない。大丈夫？緑谷くん。」

「グッ、体が縛られて動けねえ…」

止めようとしていた相澤先生は捕縛用ロープを再び首に巻きつけ、クラスメイトに警告する。

「全く…何度も個性使わすな。俺はドライアイなんだ！」
いや個性凄いのに勿体無いなアンタ。

6種目目 長座体前屈

この競技は普通にやる、といつても人間の姿じやあ関節とか不便だからスライムの姿になり早速…と思つたんだがクラスのみんなから

勢いよく突っ込まれた。

「はあ!? スライム!? お前ってどんな個性してんだよ!」

そんなに驚くことか? 別に異形系の個性だとすればそこまで珍しいことじやないだろうに。

まあ個性については皆未知数だし気になるのも当然か。

「俺の個性は【スライム】って言つてスライムになることができるんだ。」

長座体前屈の機械を掴みながら身体を伸ばしてそのことをアピールする。

「マジかよ…てつきり発動系の個性だと思つてたんだが違つたみたいだな…」

確かにこの身体能力は増強系に、暴風竜^{ヴエルドラ}の力はそれこそ発動系のよう映つていたのだろう

しかし蓋を開ければ個性名【スライム】という異形系可愛らしい能力なのだ。

記録は1200.5cmだったため四捨五入で1201cmとなつた。

「いや…もうその繰上げ要らないだろ…」

7種目目 上体起こし

こんなの普通にやるしかないな。

そう考えながら自分の身体能力に頼ることにした。
記録は130回ほどだった。

まあ30秒にしては上出来である。

最終種目 持久走

これは一番呆気なく終わってしまった。

50m走と同様に転送魔法を起動し、スタートと同時にゴール地点へと転移した。

記録は50m走と同じく測定不能。相澤先生も少し呆れながらもOKをしてくれた。

これで全種目が終了した。

相澤先生の言う通りだつたらここで最下位の生徒が除籍されてしまうことになる。

ちなみに緑谷くんは大丈夫だろう。大記録と呼べるものはボール投げのみであつたが、他の記録も悪くはなかつた。

持久走なんかも怪我が治つていたおかげで人並みのペースで走ることができていた。

「んじゃパパッと結果発表な…トータルは単純に各種目の評点を合計した数だ。口頭で説明すんのは時間の無駄なので一括表示する。」

相澤先生がそう言うと、結果が映し出された。

俺は一位、緑谷くんは12位とまずまず順位だった。

それで肝心の最下位は…

「あ…あ…」

隣にいた生徒が絶望しながらうずくまつっていた。

確かあの子は…峰田実くんだつたかな。

個性は【モギモギ】といつて弾力のある球を頭から生やし、それをもぎ取ることが出来る。

反復横跳びは大記録を出してはいたものの、それ以外の記録は今ひとつといった感じだつた。

「ちなみに除籍は嘘な。君達の能力を最大限引き出す為の合理的虚偽。」

「はあああああああ?!?」

つてマジかよ！あの時本気マジな目をしてたから信じちゃつてたわ！

「あんなのウソに決まつてているじゃない、ちょっと考えればわかりますわ。」

『否。個体名：相澤消太は素質がない場合は間違いなく除籍するつもりでした。』

クラスメイトの八百万さんに対してラファエルさんが反応した。あの言葉は虚偽でもなんでもない、俺たちがヒーローを目指すための

資格があるのか見極めるためだつたのだろう。それに俺達が合格したつてだけだ。

そのことが少し嬉しくもあるが、除籍されそうになるつてのは勘弁して欲しいものである。

そんなことを考えながら、教室へ戻つた。

高校生活二日目と戦闘訓練（前編）

雄英高校二日目。

二日目からは入学式も終わり、本格的に授業が始まる。

しかし他の高校とは違い、授業の先生は全員プロヒーローとなつている特殊な環境となつていて面白い。

例えばプレゼント・マイクの英語の授業等。いつものラジオやヒーロー活動の時とは考えられない程普通だつたり、意外な一面が見れたりする。

ちなみに内容は日本最難関の高校なだけあつて超が着くほどハードだつた。俺も一応前々世では大学を卒業しているのだが、それでもついていけないレベルなのだから流石雄英といったところだ。

まあ俺にはラファエルさんがいるのだから心配ないだろう。

『真面目に授業を受けてください。』マスター 主

とか言つてたらラファエルさんに怒られてしまつた。

長い午前の授業も終わり、昼休みとなつた。昼食は食堂でクックヒーロー【ランチラツシユ】が作る一流料理を安値で食べることができる。

本来俺には食事は必要ないのだが、人間の姿ならばしっかりと味覚はあるし、前々世の料理が食べれるのなら食べない手はない。

まあ節約しようとも考えたけど、ヴエルドラがしつかり稼いでくれてるからその必要もなさそうだしね。

そして食堂で料理を満喫した俺は、次の午後の授業に備え教室へと向かつた。

「わーたーしーがー…普通にドアから来た！」

その掛け声と共に勢いよくドアが開いた。ドアから入つてきた男は勿論オールマイト、しかも銀時代シルバーエイジのコスチュームである。

「さあ諸君。この時間の科目【ヒーロー基礎学】だ!! 単位数も最も多いぞ。そして本日行うのは…コレ!!」

オールマイトはそう言いながら手に持つてのプレートを俺達に見
えるように突き出した。

そのプレートには „b a t t l e“ と書かれていた。

「b a t t l e…ってことは戦闘訓練!？」

「その通り! そしてそいつに伴つて… 入学前に送つてもらつた『個性届け』と『要望』に沿つて作られた戦闘服!!^{コスチューム}」

リモコンのスイッチを押すと教室の壁の一部が飛び出し棚のよう
なものが出て着た。

「着替えたらグラウンドβに集合するように!」

各々がコスチュームに着替え、戦闘訓練が行われるグラウンドβへ
と向かつた。

グラウンドβにて、コスチュームに着替え終わつた俺達は皆とコス
チュームを見せ合つたり、紹介したりしてた。

「あれ、デクくんかつこいいね! 地に足ついた感じ! …要望ちゃんと
書けばよかつた…パツパツスースー恥ずかしい…」

麗日さんは恥ずかしそうに緑谷くんに自分のコスチュームを見せ
ていた。

「それにしてもリムルさんのコスチュームもかつこいいね!」

ちなみに俺のコスチュームは暖かい青いコートと青いブーツに黒
いズボン。首元には白いマフラーを巻き、腰には刀を差している。そ
してなんと言つても顔にはシズさんの形見である仮面を付けている。
前世で活動していた服装と全く同じである。特に戦闘に有利な機
能が付いていたり、こだわりがある訳ではない。ただ、俺はこの格好
がなんとなく好きなのだ。

「ありがとう緑谷くん。緑谷くんのコスチュームもオールマイトを意
識していくかつこいいと思うよ。」

緑谷くんはオールマイトを意識していたのに気付いて貰えたのが
嬉しかつたらしく、笑顔で「ありがとう!」と言つてくれた。まああ
んな格好をしていたら気付かないわけ無いと思うが…

「それじゃあ始めるか！有精卵共！」

そんな話を緑谷くんとしたら、そろそろ授業が始まるようだ。この後はオールマイトから戦闘訓練についての詳細が説明された。まず、ヒーローチーム2名とヴィランチーム2名に分かれ闘う。ヒーロー側はヴィランが保持している核を回収する、又はヴィラン2名を捕獲することで勝利条件を満たすことができる。逆に、ヴィラン側は核を制限時間まで捕獲する、又はヒーロー2名を拘束することで勝利となる。

核はもちろんレプリカを使用するが、今回の状況設定を踏まえ、本物の核であると仮定して行動するべきだろう。

オールマイトも言つていたが、本物の敵ヴィランつてのは闇に潜む…といふことで今回は室内戦となるらしい。それで核を保有されていると考えるとヒーロー側が不利と考えるのが妥当だろう。

ちなみに肝心のチームに關してはくじ引きで決めるらしい。

「先生！このクラスは21人の為1人余つてしまります！」

飯田くんからもつともな指摘が飛んできた。確かにこのクラスは特例で21人となり、2人ずつチーム分けしていくと誰か1人余つてしまう。

当たり前だが、1人では2人に對してほとんど勝ち目がない。それでは訓練にもならないだろう。

「それについては心配無用！」

流石オールマイト。やつぱりここは公平に決める案があるのだろう。

「今回の戦闘訓練はハンデとしてリムル少女は1人とする！」

「はあああ！」

何言つてんだ!?この人！

いくらなんでもそれは問題ありまくりだろ！

オールマイトの発言に対しても流石に「ええ…ちょっとリムルさんが可哀想なんじゃない?」「ケロ、リムルちゃんはそれで大丈夫なのかなしら…」と少し批判的な声もあつた。

逆に俺の個性把握テストや、試験会場が同じだつた子達はそのくら

いのハンデで十分と言つていたり、何ならそれでも足りないとオールマイトの案に賛成している声も聞こえた。

そして、結局は俺は1人チームとして訓練に参加することとなつた。

くじ引きの結果は、一試合目が緑谷・麗日ペア v s 爆豪・飯田ペアとなり、二試合目が俺 v s 轟・障子ペアとなつた。

よりによつてクラス屈指の実力者と噂される轟と、室内戦としては圧倒的なアドバンテージを誇るであろう索敵に長けている障子という厄介なペアを引いてしまつた。俺の見立てでは全てのペアで一番強いのではないか…と思つてゐる。

一試合目の緑谷チームと爆豪チームの闘いが始まつた。

結論から言うと勝つたのは緑谷くんのチームだつたが、内容的には爆豪くんのチームだつたと言える。

最終的な決め手となつた攻撃なのだが、緑谷くんが A F Oワン・フォー・オールで下の階から爆風で上の階を壊し、その瓦礫を麗さんさんが振り回すことによつて勝利した。

しかし、こんな戦法は核を保有された室内では勿論使用することができないリスクのある戦法だ。のちの講評では、MVPは負けた爆豪チームの飯田くんとなつた。

そして、問題の二試合目がそろそろ始まろうとしていた。

ちなみに俺がヴィラン側となり、核を保有する立場となつた。普通なら核を保有して逃げ切つた方が勝率が高いと考えるだろう。1人チームなのだから拘束された時点で全員拘束されたと見做され敗北となつてしまふし、2対1の状況となると勝てる見込みがほぼ0となつてしまふと考えるからだ。

しかし、今回の作戦はその逆。こちらから積極的に仕掛け、核を保有されるよりも前に2人共拘束してしまおうという作戦だ。

恐らくだが、相手は障子くんが索敵した後、轟くんが室内全てを凍

らせる奇襲を仕掛けてくるだろう。そうなると核を保有して制限時間まで逃げ切るのはほぼ不可能だ。つまり、こちらから仕掛けるしか勝機がない…とラファエルさんが言っていた。

と、まあこんな感じで勝機が薄いかのように話したが、正直なところここまでヤバいとは思っていない。

こちらは前世で得た能力が多く、2人くらいなら正直なんとかなるだろうとも思っているしなんなら負ける気がしない。

自画自賛のように聞こえてしまうかもしれないが、実際そんなもんだろう。油断しなければ負ける相手ではないからね。

俺がそんなことを考えてる間に、試合開始の合図が鳴つた。